

2025年1月8日

## 2024（令和6）年度「大学院の教育・研究等に関するアンケート」総括

福山大学研究科長等協議会議長 井ノ内直良

本学大学院生を対象に、大学院の教育・研究等に関する2024（令和6）年度のアナケート調査を実施した。本学における大学院教育の改善に資するため、同調査の集計結果を総括する。アンケート結果は、2025年1月～2月に研究科ごとに大学院生に対してフィードバックされ、総括は3月末までに福山大学HP上で公表される。

### 結果の概要

大学院進学目的は、「研究を深めたいから」と「専門分野の知識を深めたいから」の回答を合わせると50.0%となり、続いて「資格を取得したいから」の39.3%であることから、研究や知識を深め、資格を取得することが主な進学目的であると考えられる。3つのポリシー

（AP、DP、CP）、授業科目の構成、シラバスはかなり理解されており、授業内容・時間・方法との整合性、成績評価に対しても満足が得られている。研究テーマについての指導や手続き等も良好な評価が得られており、これらに関して問題はないと考えられるが、研究の進捗状況に関しては、「どちらとも言えない」、「あまりそう思わない」、「全くそう思わない」と回答している大学院生が合わせて1/3程度存在し、皆が良好な研究の進捗状況を実感できる指導が望まれる。指導教員の指導や助言に対しては、全体に高い評価を受けており、教員とのコミュニケーションはよくとれている。ただし、演習・実習・実験の施設・設備の整備、情報収集環境や図書館に関しては否定的な回答も若干あり、さらなる改善の必要があるように思われる。奨学生（金）制度による経済的支援は、毎年低い評価点であり、経済的支援の充実が課題である。総合的な満足度は、昨年度よりも幾分高い評価が得られているが、今後も引き続き、大学院の教育・研究レベルを高めていくことが期待される。

### 調査の方法と内容

- ・実施期間：2024（令和6）年11月11日（月）～11月29日（金）
- ・実施方法：ゼレツソを用いて実施。
- ・調査対象：大学院在籍学生は32名であり、アンケート対象者32名中回答は28名であった（回答率87.5%）。研究科別の回答率は、経済学研究科3名中3名（100.0%）、人間科学研究科12名中11（91.7%）、工学研究科14名中11名（78.6%）、薬学研究科博士課程3名中3名（100.0%）であった。回答した28名の学年別内訳は、修士課程1年次または博士前期課程1年次：11名、同2年次：13名、博士課程1年次または博士後期課程1年

- 次：2名、同2年次：2名であった。  
・調査内容：昨年度のものを踏襲した。

## 集計結果

### I. 大学院進学の目的について

#### 1. 大学院進学の主たる目的について（質問1）

進学の主たる目的（単数回答）では、「資格を取得したいから」が39.3%（昨年45.5%）でトップであったが、昨年度と比較すると、「資格を取得したいから」は少し減少した。次いで「研究を深めたいから」が25.0%（昨年33.3%）「専門分野の知識を深めたいから」が25.0%（昨年12.2%）と同率で2番目であった。また、大学院進学の主たる目的に準ずる目的では、「専門分野の知識を深めたいから」が45.0%、「研究を深めたいから」が20.0%と高い割合を示すことから、進学の目的が知識探求にあることも明白である。

#### 2. 大学院進学時のAP（アドミッション・ポリシー）の理解度（質問2、平均4.07）

大学院への進学に際して、アドミッション・ポリシーを理解して受験したかの質問で、「強くそう思う」と「だいたいそう思う」を合わせた割合は85.7%であり、昨年度の81.9%よりもさらに多く、「どちらとも言えない」と「あまりそう思わない」の7.1%を大きく上回っている。ただし、各研究科での受験指導や入試説明会の実施などを引き続き充実させる必要がある。

### II. 大学院の授業について

#### 1. 研究科のDP（ディプロマ・ポリシー）・CP（カリキュラム・ポリシー）と授業科目の構成（質問3、平均4.21）

両ポリシーに照らした授業科目の構成が適正であるかについて、「強くそう思う」と「だいたいそう思う」との回答は、それぞれ32.1%（昨年27.3%）、60.7%（昨年63.6%）であった。この2つを合わせた回答は昨年度の90.9%から92.8%とさらに微増し、高い水準を保っている。5点満点での評価（平均値）は、4.21である。各研究科の授業科目構成もDP、CPに沿っていると判断されている。学部時代からのDP、CPの理解が進んでいることも要因と考えられる。

#### 2. シラバスが適切かどうか（質問4、平均4.25）

35.7%（昨年36.4%）が「強くそう思う」、57.1%（昨年54.5%）が「だいたいそう思う」と回答している。両方を合わせると92.8%（昨年90.9%）となり、ほとんどの院生が適切と感じていると言える。たゆまぬPDCAサイクルが機能していることが結果として現れたと判断できる。

### 3. 授業内容とシラバスの整合性（質問5、平均4.36）

授業内容がシラバスの内容をカバーしているかどうかについて、「強くそう思う」が39.3%（昨年36.4%）、「だいたいそう思う」が57.1%（昨年48.5%）であった。両方を合わせて96.4%（昨年84.9%）であり、昨年と比べて10%以上増加した。どの授業内容もシラバスの内容をかなりカバーできていると考えられることから、今後もこの傾向を維持することが重要と考えられる。

### 4. 授業方法とシラバスの整合性（質問6、平均4.32 質問7、平均4.25）

授業回数や授業時間はシラバスの記載のとおりかという質問に対して、「強くそう思う」と回答した人が39.3%（昨年60.6%）、「だいたいそう思う」が53.6%（昨年36.4%）であった。これら合計は92.9%（昨年97.0%）であり、全体としてシラバスに記載された通りの授業回数や授業時間は厳守されていると考えられる。

授業方法がシラバスに照らして適切であったかの質問に対しては、4.25（昨年4.39）であったことから、概ね授業方法全般としては評価されていると思われるが、昨年度よりは点数が若干下がっていることから、今後も適切にシラバスに沿って授業を実施していく必要がある。

### 5. 成績評価方法の明確性（質問8、平均4.36）

成績評価方法がシラバスや教員の説明などから明確なものとなっていたかどうかについての質問では、「強くそう思う」が46.4%（昨年51.5%）、「だいたいそう思う」が42.9%（昨年42.4%）と、両方合わせて89.3%で成績評価方法はほぼ明確であると考えられる。

### 6. 成績評価の妥当性（質問9、平均4.36）

成績評価が納得のいくものだったかどうかの質問では、「強くそう思う」が39.3%（昨年48.5%）、「だいたいそう思う」が57.1%（昨年48.5%）と、両方で96.4%（昨年97.0%）となっており、成績評価も妥当であると判断されている。質問8とあわせ、成績評価の明確性、妥当性は高く評価されている。

## III. 研究指導ならびに研究状況について

### 1. 研究テーマについての指導教員等との話し合い（質問10、平均4.71）

研究テーマを決定するにあたり、指導教員や副指導教員と十分話し合いをしたかどうかという質問に対して、「強くそう思う」が78.6%（昨年72.7%）、「だいたいそう思う」が17.9%（昨年27.3%）であった。肯定的な回答は96.5%（昨年100.0%）とほとんどの院生が十分な話し合いをしていると回答しているので、ほとんどの研究科において、研究テーマ選定に際し十分な話し合いが行われていると思われるが、あまりそう思わないという意見も3.5%あったことから、今後、肯定的な回答が100%になるように指導教員は心掛ける必要がある。

2. 指導教員等による研究計画・研究指導に関するガイダンスやオリエンテーション（質問11、平均4.57）

指導教員等はDPにもとづく具体的な研究計画や指導について、ガイダンスやオリエンテーションをしたかという質問に対して、「強くそう思う」と回答した人は64.3%（昨年42.4%）で、「だいたいそう思う」が32.1%（昨年48.5%）であり、肯定的な回答は96.4%（昨年90.9%）と高い値であった。計画に対するガイダンスやオリエンテーションも大学院生に納得する質および量でなされていると評価できる。

3. 学位論文の審査手続きや審査基準に関する説明（質問12、平均4.43）

学位論文の審査手続き、基準について指導教員等から説明を受けたかという質問では、「強くそう思う」が57.1%（昨年54.5%）、「だいたいそう思う」が35.7%（昨年39.4%）であり、合わせて92.8%と肯定的な回答率が高かった。しかしながら、「全くそう思わない」が3.6%（1名）であった。学位論文の審査手続きや基準について院生が知っておくことは研究遂行上も重要なことであるので、今後も丁寧な説明が必要である。

4. 研究計画の作成における指導教員の指導（質問13、平均4.61）

研究計画を立てるにあたって指導教員の指導を受けたかという質問に対して、「強くそう思う」が67.9%（昨年63.6%）、「だいたいそう思う」が28.6%（昨年30.3%）で合計96.5%（昨年93.9%）と高い評価が続いている。今後も引き続き、研究計画に基づいた研究指導が望まれる。

5. 学位論文の作成・公表に対する教員の指導・助言（質問14、平均4.54）

学位論文の作成・公表に向けて指導教員等は指導や助言を行ったかの質問では、「強くそう思う」が64.3%（昨年66.7%）、「だいたいそう思う」が32.1%（昨年33.3%）で合計96.4%（昨年100.0%）と良好であり、教員の指導・助言は適切になされていると評価できるが、「全くそう思わない」が3.6%（1名）あった。

6. 研究の進捗（質問15、平均3.61）

研究は順調に進んでいるかという質問に対して、「強くそう思う」が17.9%（昨年24.2%）、「だいたいそう思う」が46.4%（昨年24.2%）、「どちらともいえない」が17.9%（昨年30.3%）、「あまりそう思わない」が14.3%（昨年18.2%）、「まったくそう思わない」が3.6%（昨年3.0%）であった。順調ではないという回答が昨年度よりは少なくなっており、研究が順調に進んでいる人の合計が64.3%であり、昨年の48.4%よりも上昇した。今後益々、研究の進捗を実感できる指導等、様々な工夫が望まれる。

#### 7. 問題解決能力の修得（質問16、平均4.00）

研究の遂行を通じて、問題を発見し解決する能力が身についていると思うかという質問では、「強くそう思う」が25.0%（昨年30.3%）、「だいたいそう思う」が57.1%（昨年42.4%）、「どちらともいえない」が10.7%（昨年24.2%）「あまりそう思わない」が7.1%（昨年3.0%）であった。肯定的な回答が昨年度よりは増加しているものの、「強くそう思う」が減少し、「あまりそう思わない」が増えているので、日々の丁寧な指導により課題解決能力の向上に取り組むことが必要と考えられる。

#### 8. 学修時間の確保（質問17、平均3.86）

授業以外の学修時間を十分確保しているかという質問では、「強くそう思う」が28.6%（昨年27.3%）、「だいたいそう思う」が42.9%（昨年24.2%）、「どちらとも言えない」が14.3%（昨年24.2%）、「あまりそう思わない」が14.3%（昨年21.2%）、「全くそう思わない」が0.0%（昨年3.0%）であった。「強くそう思う」と「だいたいそう思う」の合計が71.5%（昨年51.5%）と昨年度よりも大幅に増加している。1週間の平均学修時間は、研究科や個人によって異なっていた。

### IV. 研究環境について

#### 1. 研究上必要な施設や設備の整備状況（質問18、平均3.86）

研究を遂行するために必要な演習・実習・実験の施設や設備は整備されていると思うかに対して、「強くそう思う」が25.0%（昨年21.2%）、「だいたいそう思う」が46.4%（昨年42.4%）、「どちらともいえない」が17.9%（昨年24.2%）、「あまりそう思わない」が10.7%（昨年12.1%）、「まったくそう思わない」が0.0%（昨年0.0%）であった。肯定的な回答が71.4%あったが、「あまりそう思わない」の回答が10.7%あり、最先端の研究が要求される大学院の研究環境は、計画的に整備されることが望ましい。

#### 2. 研究上必要な情報収集環境（質問19、平均4.00）

研究上必要な情報収集環境（学術図書・雑誌、ネット、ソフトウェア等）は整備されていると思うかという質問では、「強くそう思う」が35.7%（昨年24.2%）、「だいたいそう思う」が39.3%（昨年57.6%）と合計75.0%（昨年81.8%）であった。否定的回答は7.2%あった。情報収集環境は研究に大きく支障を生じる状態ではないと判断できるが、否定的回答が7.2%存在することより、今後も計画的に更新に取り組むことが必要であると考えられる。

#### 3. 図書館の利便性（質問20、平均4.14）

学修に際し、図書館は利用しやすいと思うかの質問に対して、「強くそう思う」が46.4%（昨年39.4%）、「だいたいそう思う」が28.6%（昨年36.4%）であり、「どちらともいえない

い」が17.9%（昨年18.2%）、「あまりそう思わない」が7.1%（昨年6.1%）であった。「全くそう思わない」の回答はなかった。物理的な距離の影響や研究で必要となるジャーナルに関する整備は今後も必要と考えられる。

#### 4. 奨学生（金）制度による経済的支援（質問21、平均3.71）

内外の奨学生（金）制度による経済的支援は十分であると思うかの質問では、「強くそう思う」が17.9%（昨年30.3%）、「だいたいそう思う」が53.6%（昨年30.3%）、「あまりそう思わない」が10.7%（昨年6.1%）、「まったくそう思わない」が3.6%（昨年3.0%）であった。「あまりそう思わない」と「全くそう思わない」の合計が14.3%あり、一層の充実を望んでいることが示唆される。大学院生の入学者数増加のためにも経済的支援の充実が望まれる。

#### 5. TA（ティーチング・アシスタント）・RA（リサーチ・アシスタント）制度（質問22、平均4.21）

大学院生としてこれらを経験することは、経済的な利得の点を除いてもプラスになると思うかの質問に対して、「強くそう思う」が42.9%（昨年42.4%）、「だいたいそう思う」が35.7%（昨年42.4%）であり、肯定的にとらえる人が78.6%（昨年84.8%）と多い。各研究科でTA・RAに際しての指導がそれなりに適切に行われた成果と考えられる。TAに対するオリエンテーション、TA実施後の指導等による制度の充実も行われているが、さらに大学院生の意見にも十分耳を傾け、TA制度の運用を研究科と大学院生双方にとって有益なものとする継続が重要である。

#### 6. 教員とのコミュニケーション（質問23、平均4.39）

日常生活や研究を進める上で、教員とのコミュニケーションは適切にとれていると思うか、という質問では、「強くそう思う」が53.6%（昨年48.5%）、「だいたいそう思う」が35.7%（昨年36.4%）と両方で89.3%（昨年84.9%）となり、昨年度よりは肯定的な回答が幾分増加し、一定の評価はできると考えられる。また、指導教員のみならずスタッフの多くとコミュニケーションがとれているものと推察される。

#### 7. 他の大学院生・学生との人間関係（質問24、平均4.00）

日常生活や研究を進める上で、他の大学院生・学生等との人間関係は、円滑な状態にあるかという質問では、「強くそう思う」が32.1%（昨年45.5%）、「だいたいそう思う」が46.4%（昨年33.3%）であり、78.5%が円滑と考えている。大学院生同士の交流は円滑に行われているようである。

#### 8. 教員の対応（質問25、平均4.43）

日常生活や研究を進める上で、教員の対応は適切かの質問では、「強くそう思う」が53.6%（昨年48.5%）、「だいたいそう思う」が39.3%（昨年45.5%）であり、大半が肯定的回答をしている。

#### 9. 職員の対応（質問26、平均4.07）

日常生活や研究を進める上で、職員の対応は適切かの質問では、「強くそう思う」が39.3%（昨年33.3%）、「だいたいそう思う」が32.1%（昨年63.6%）であり、教員の対応の評価より幾分下回ってはいるが、比較的高い評価と思われる。

#### 10. 大学院の教育・研究指導体制（質問27、平均4.18）

大学院の教育・研究指導体制は、総合的には満足できると思うかという質問に対して、「強くそう思う」が25.0%（昨年33.3%）、「だいたいそう思う」が67.9%（昨年45.5%）であり、平均点が昨年度の4.06より向上し、肯定的評価が得られたが、「どちらともいえない」と「あまりそう思わない」の回答が3.6%（1名）ずつあったことから、今後、さらに教育・研究指導体制を強化することが必要である。

### 総括

2017（平成29）年度より学生ポータルサイト「セレッソ」で調査に回答するようになり、匿名性は確保されるが、回答率が低下する懸念があった。回答率は2018年度83.6%、2019年度78.7%、2020年度91.0%、2021年度88.9%、2022年度85.4%、2023年度91.7%と推移してきたが、今年度は87.5%であった。院生のアンケートに対する積極的な姿勢があったことが主ではあるが、アンケート期間中、研究科長を通してアンケートへの回答の呼びかけを実施したことの効果もあると考えられる。以下に、結果のまとめを大項目ごとに行う。

#### I 大学院入学の目的について（質問1、2）

大学院入学の目的として、全体的には「資格を取得したいから」と回答する割合が高かった。準ずる入学目標として、専門知識を身につけるため、次いで研究を深めたい、就職に有利という回答が多かった。また、多くの大学院生は、アドミッション・ポリシーを理解した上で入学している。

#### II 大学院の授業について（質問3～質問9）

研究科のDP（ディプロマ・ポリシー）・CP（カリキュラム・ポリシー）と授業科目の構成、シラバスの策定、授業内容・時間・方法との整合性、成績評価のいずれの項目も高い評価が得ら

れており、ポリシーの概念から具体的な実施に至るまで問題はないと評価できる。ただし、今後も各教員が一層の工夫をすることが望まれる。

### III 研究指導ならびに研究状況について（質問10～質問17）

研究テーマについての指導教員等との話し合い、指導教員等による研究計画・研究指導に関するガイダンスやオリエンテーション、学位論文の審査手続きや審査基準に関する説明、研究計画の作成における指導教員の指導、学位論文の作成・公表に対する教員の指導・助言は、いずれも良好な評価が得られており、これらに関してほぼ問題はないと考えられる。研究の進捗に関しては、研究が順調に進んでいる人の合計が64.3%であり、昨年の48.4%よりも上昇している。また「あまりそう思わない」と「全くそう思わない」あわせて17.9%の大学院生が回答しており、順調ではないという回答が昨年度の21.2%よりわずかに減少している。今後、否定的な回答がゼロになるよう、教員の日々の指導により、大学院生が研究の順調な進捗状況を実感できる様々な工夫が望まれる。

### IV 研究環境について（質問18～質問27）

演習・実習・実験の施設や設備、情報収集環境や図書館に関して、概ね肯定的であったが、平均点の評価が3点台と低く、検討の必要性が示唆される。奨学生（金）制度による経済的支援のアンケート結果も3点台と低い評価点である。大学院入学者数増加のためにも経済的支援は重要と考えられ、大学院生が一層の充実を望んでいることを示唆している。経済的支援の役割も担うTA（ティーチング・アシスタント）・RA（リサーチ・アシスタント）制度は、経済的な利得の点を除いてもプラスになるとの回答であり、TA・RA制度は経済的・教育的いずれの側面でも有効であると評価できる。

最後の今年度の大学院の教育・研究指導体制の総合的満足度は4.18であり、昨年度の4.06を上回る評価であったが、今後、大学院生の総合的満足度をさらに高めることが望まれる。大学院においては、指導教員の濃密な指導形態で研究が行われているが、研究科教員が研究室の垣根を越えて指導をしたり、教職協働で大学院生をサポートしたりするなどの新しい取り組みを行えば、大学院の教育・研究指導体制の満足度（質問27）をさらに向上させることになると期待される。教育・研究のいずれにおいても、教員とのコミュニケーションに関する評価は非常に高く、きめ細やかな指導が常日頃から行われていることが評価に現れている。

今後は、大学院の教育・研究をさらに充実させることで、大学院生の人数を以前のように増加させることが肝要である。

### V 自由記入

今年度の自由記入への書き込みに、時間的制約、Wi-Fi環境、職員の対応などに関する記述があった。今後、このような意見に対しても丁寧に対応する必要があると考えられる。